



②

むかし いま にせんごひやくねん まえ きた
むかし 昔、今から二千五百年も前。北インド、ヒマラヤ
か ぴら ちい ちい しろ
のふもとにカピラという小さな小さなお城がありました。
な ぶか りっぱ おうさま
そこには、情け深くてご立派な王様と、マールヤ様というお優
きおきさま ひとびと へいわ く
しいお妃様のもと、人々が平和に暮らしておりました。
おうさま さま こども さま
王様とマールヤ様は子供を授かることを待ち望んでいました
なかなか せず
が、中々授かることができませんでした。

— ぬく —



③

ある夜よるのことです。

マーヤ様さまは、白い象しろぞうがおなかに入るはい、不思議ふしぎな夢ゆめをご覧らんになりました。

それから間まもなく、マーヤ様さまは小ちいさないのちを身みごもりました。

— ぬく —



4

数か月がたち、マーヤ様はお供をつれて、ご出産のために
里帰りすることになりました。
そして、一行がルンビニーの花園で休憩していた時のこと
です。

「ああ、ここはなんて美しいところなのかしら。
小鳥たちはしあわせそうに歌い、そして花々がこんなに
咲き誇って……。」

マーヤ様

『ウウツ!』

マーヤ様は突然、その場にしゃがみ込んでしまいました。
いよいよ赤ちゃんが生まれるしるしです。

その夜はずっと、おつきの者や家来たちは心配で心配でた
まりませんでした。そして、同時に、どんな立派な赤ちゃん
がお生まれになるのか、とつても楽しみでもありました。

そして、いよいよ……

—ぬく—



しがつようか よあ とうと
四月八日の夜明け、ひとつの尊いのちがこの世に生まれ落ちま
した。その方は、世界中の悩み苦しむ人々を救い、喜びを与える
ために、あらわれてくださったのです。

ひと どうぶつ くさき いだい かた たんじよう ころ そこ かんどう
人も、動物も、草木も、偉大な方の誕生に心の底から感動して
いました。お誕生をお祝いするかのようには、空からは素晴らしい
香りの甘い雨が降り注ぎ、王子さまの身体を清めました。鳥たち
は喜びの歌を歌い、花々は益々美しく輝きました。

おうじ どうじ ななほある
王子さまは、お生まれになると同時に七歩歩かれ、こうおっしゃ
いました。

王子 おうじ

てんじようてんげゆいがどくそん
「天上天下唯我独尊！」

うちゆう なか とうと
これは宇宙の中でわたしというものほど尊いものはない、という
意味の言葉です。『それぞれの人にとってわたしはたった一人、だ
から、ひとりひとりがみんな大切なんだよ』と、おっしゃってい
るのです。

おうじ しやかさま とう
王子さま、のちのお釈迦様は、こうしてお生まれになりました。
そして、お釈迦様のお誕生日は『花まつり』と呼ばれ、天と地を
指さした小さなお釈迦様の像に、みんなで甘茶をかけてお誕生を
お祝いするようになったのです。

おうじ なづ
お生まれになった王子は、シツダルタと名付けられました。
かなしいことに、お母様のマアヤ様は、王子が生まれて七日目に亡
くなってしまいました。王子は大切に、何不自由なく育てられ
ました。

— ぬく —



⑥

何年かたったある年、王様はシツダルタにきれいなお嫁さんを迎えさせました。
やがて二人のあいだには、かわいい赤ちゃんが生まれました。
でも、幸せな生活が続けば続くほど、シツダルタは悩み始めました。

「私だけが、こんなに幸せでいいのだろうか？
私にはもっと、しなくてはならないことがあるんじゃないだろうか？」

— ぬく —



7

シツダルタ

ある日、シツダルタがお城の外へ散歩に出かけようと、東の門から外へでると、身体の弱った老人と出会いました。ゆっくりふらふらしながら歩いていく老人をみて

「ああ、いつか私も、あのように年老いてしまおうのだろうか」

と、うつむきました。

またある日、今度は南の門を出ると、そこには病氣の人が横になって苦しんでいました。

「ああ、しんどい、しんどい、立ち上がることもできんのか」

シツダルタ

病人
びょうにん

「ああ、私は今は健康だが、いつあのような病氣になるかわからない。恐ろしいことだな・・・」

王子はそう思うと、ぶるぶるつとふるええました。

そしてまた別の日、王子は西の門を出ました。

そこは、お葬式の真っ最中でした。

「どんなに幸せそうに生きていても、みんないつかは死ななければならぬ。この私も、そして、私の周りの大切な人たちも・・・。なぜなんだ、いったいどうしたらいいんだ」

— ぬく —



シツダルタ

ある日、シツダルタが北の門から外に出ると、粗末なものを身にまとった修行者に出会いました。

「あなたは、なんのために修行をしているのですか？」

と、シツダルタは修行者に話しかけました。

修行者

「王子、人はみな年をとり、病気になる、いつかは死んでいきます。たいへん恐ろしいことです。私はその苦しみを乗り越える方法を見つけるために、修行をしています」

シツダルタ

「苦しみを乗り越える方法・・・」

シツダルタは、これこそが私の進むべき道だと思いました。

— ぬく —



⑨

しばらくたったある夜、シツダルタはみんなが寝静まった
のを確かめて、こっそりお城を抜けだしました。
王子としての地位も名誉も財産も、愛する家族もすべて捨
てて、修行の道に入ることを決心したのです。
そして、この世の苦しみを乗り越える方法を見つけけるまで
は、決して帰ってこないと堅く誓ったのでした。

— ぬく —



シツダルタは、人里はなれた山や森に入って、厳しい修行にはげみました。

一日中、逆立ちをしている修行。

無数の針の上にガマンして座り続ける、痛い痛い修行。

苦しいポーズをとったまま、いつまでも動かない修行、な

どなど、ありとあらゆる修行をしました。

でも、そんな苦しい修行を何年も続けて、身体はボロボロになっても、一向に悟りは開けませんでした。

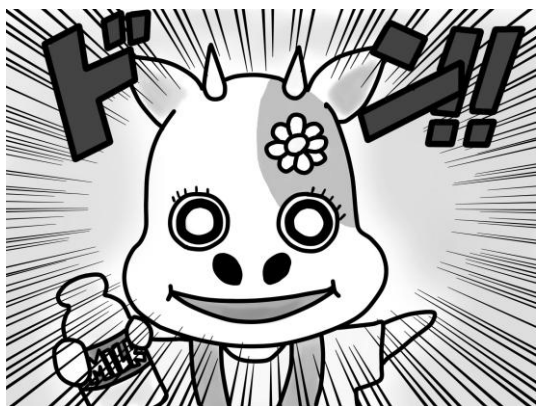
シツダルタが修行を始めてから、はや六年の歳月が過ぎていました。

「もう六年も修行を続けているが、心の苦しみは少しも消えない。

ただ身体を痛めつけるだけではだめだ。でも、いつたいどうしたらいいんだろう？

ああ、疲れきってしまった。もう、身体を起こしてられない・・・」

シツダルタはその場に倒れこんでしまいました。そこへ一人の娘が現れました。



スジャータ

「まあ、あんなところに人が倒れている。どうしたんですか、しつかりしてください。さあ、ここに牛乳があります。これを飲めばきっと元気になるでしょう」

シツダルタ

「ああ、おいしい。ありがとうございます、娘さん、あなたのお名前は？」

スジャータ

「はい、スジャータと申します」

シツダルタ

「スジャータ、スジャータ・・・はて、どこかで聞いたことがあるような・・・まあいいか。」

スジャータ、おかげでだいぶ元気になりました。

もし私が悟りを開くことができたなら、あなたにも説いてあげましょう」

スジャータ

「ありがとうございます。どうかお元気で」

シツダルタ

スジャータと別れたシツダルタは大きな木を見つけました。「あそこに大きな菩提樹がある。よし、あの木の下に座って考えよう」



大魔王 だいまおう

いたずらに身体をいじめることの無意味さに気付いたシツ
ダルタは、おおいなる悟りにいたるための最後の瞑想に入
りました。でも、シツダルタが悟りを開くのを恐れていた
ものがいました。それは、悪の支配者、大魔王です。
大魔王はシツダルタの邪魔をしようと、いろんな姿に化け
てシツダルタの前に現れました。

シツダルタ

「おい、シツダルタそんな瞑想をしても意味がないぞ！や
めとけ、やめとけ。俺と一緒に来たなら、ごちそうを食べ
たり、楽しい思いができるんだぞ。なあ、シツダルタ、俺
と一緒に来いよ。楽しくやろうぜ、なあ」

大魔王 だいまおう

「クソー心が揺れる。だが私が楽しいだけでは誰もすくわ
れないのだ、とつとと立ち去れ！」
「むむ、俺の攻撃がまったくきかない・・・もうムリだ」
さすがの大魔王の攻撃も悟りを目指すシツダルタには歯
が立たず、あきらめて逃げていってしまいました。

3分の1ぐらいぬきながら

何日も何日も、ひたすら瞑想を続けるシツダルタ。

そしてついにある朝、東の空に朝日が輝きはじめたその時
に・・・

ぬく



シツダルタ

シツダルタもハツと気づきました。
そうです。厳しい修行生活をへて、ここに悟りが開かれた
のです。

「ああ、なんと美しい夜明けだ。ついに私は心の苦悩を乗
り越える方法を見つけたぞ。

正しい教えを悟ることができたのだ。

私はブツタになったのだ」

この時、シツダルタは三十五歳。悟りを開いてからは『真理
に目覚めた人』という意味の《ブツタ》と呼ばれました。

また、シヤカ族の王子でもあったことから、《釈迦牟尼》つ
まり『シヤカ族の聖なる人』とも呼ばれ、私たちが使う『お
釈迦さま』というお名前はここからきています。

— ぬく —



それからのお釈迦さまは、苦しんだり悩んだりしている
ひとびとやきことば
人々に優しい言葉をかけ、多くの人たちに正しい生き方を
おし
教え、生きる喜びを伝えて歩きました。

お釈迦さまがお生まれになってから、約二千五百年。

今でも、世界中で、お釈迦さまの教えは大切にされています。

この紙芝居を見てくれた皆さんも、

『明るく 正しく 仲良く』

というお釈迦さまの教えをしつかり守って、どうか心の大きな人になってくださいね。

おしまい

おしゃかさま 14 場面

非売品

2015年6月30日発行

発行者 真宗大谷派山陽教務所長 木曾 修

脚本 海津 隆明

絵 山科 立人

製作・企画 山陽教区 教化委員会 青少幼年部

〒670-0044

兵庫県姫路市地内町1番地

青少幼年部 【部長】 海津 隆明

【副部長】 寺川 正道

中杉 寛法・南枝 尚美・山科 立人

高谷 千賀子・水野 真成・廣幡 俊道

(任期 2011.11.1~2014.12.31)

かみしばい おしゃかさま



①

かみしばい

おしゃかさま

ぬく